

鹽板・歲時論 第七十九

I

黃帝岐伯に問ひて曰く、經に言ふ、一夏日、暑に傷るるを秋に
 痿を病いと。痿の發するは時を以てす。其の政は何ぞや。岐伯
 對へて曰く、邪は風府に客し、病は脊を循りて下ふ。衛氣は
 一日一夜に一節に風府に大會し、^{其れ}明日日に一節を下ふ
 故に其れ日々作す。此れ其れ皮膚の脊背に客するは、^{此れ}
 故に風府に客する毎に腠理開く、腠理開くときは則ち邪風
 入り、邪風入るときは則ち病作る。此れ日に作す。一節に作すは、^{此れ}
 一節に作すは、^{此れ}

鹽七十九一

邪風(もとほ、衛と氣) ^{小管}
 解(解) ^解
 邪風(もとほ、衛と氣) ^{小管}
 解(解) ^解

下りて、皮膚に客す。二十二日に一節に入り、以衛之脈に
 注ぐ。其の行くは九日に一節の缺盆の中に出づ。其の氣は上行
 するの政に、其の病あり、^や補之益之。其れ内のかた五藏と
 横連する。其の原に挿し、其の道は遠く、其の氣は深く、其の
 行くは遅く、日に作す。能はむ。故に日と次きて、乃ち
 高種して作すなり。

黃帝曰く、衛氣、風府に至る毎に腠理乃ち發す、發くときは

鹽七十九一

邪氣

則ち邪も入ふ其れ衛氣日に一節を下しは則ち風府に當る

素(邪)發

さうは奈何。岐伯曰く風府は常なく衛氣の應する所

素(邪氣の會する所。則ち其れ存なり。)

必し其の腠理を聞く。氣の會する所。節有りて則ち其れ府有り。

し(こころ) 素(以)

黃帝曰く善しと。夫れ風の瘡に發くや。相以發に同類に之風は

そ(し)り

常に在らざる。瘡は舒て時を以て休むは何ぞ也。岐伯曰く風氣は

其の處に留り。瘡氣は經絡に隨ひ。決んで以て内に搏ふ故に衛

氣應いて乃ち作る也。帝曰く善しと。

IV

黃帝、少師に問ふて曰く、余聞く、四時、八風、人に中る也。故に

酉七九一三

(し)り

氣層有り。寒りしは則ち皮膚急し。之れ腠理閉す。暑りしは則ち

皮膚緩す。之れ腠理開す。賊風、邪氣、因つて以て入るを得ふか。

は

將たまひ、必し須に八正の虚邪、乃ち能く人を傷ふか。少師答へて

曰く、然るに、賊風、邪氣、人に中る也。時を以て得ず。然るに

ス(中)る

必し其の間に因る也。其の入りて深く、其の内に極まり入る也

病する也。其の人は病す也。卒業有り。其の間に因る也。

ウ(中)る

其の入りて深く、以て其の病を留る也。徐に之を遣し。

黃帝曰く、寒温有るは、和之通へば、腠理も開かず。然るに

酉七九一四

則ち邪も入ふ其れ衛氣、日に一節を下れば、則ち風府に當り

ざるは奈何、岐伯曰く、風府は常なく、衛氣の應する所、

必す其の腠理を聞く、素(邪風の合する所、則ち其れ府なり。) 氣の合する所、節なりと、則ち其れ府なり。

II

黄帝曰く善しと、夫れ風の瘧に與くや、相與に同類にも、風は

常に左よども、瘧は行て、時を以て休むは何ぞ也、岐伯曰く、風氣は

其の處に留り、瘧氣は經絡に隨ひ、決んで以て内に搏ふ、故に衛

IV

氣應じて乃ち作る也、帝曰く善しと、
黄帝、少師に問ひて曰く、余聞く、四時、八風、人に中る也、故に

寒暑有り、寒りれば則ち皮膚急して、腠理閉つ、暑ければ則ち

皮膚緩みて、腠理開つ、賊風の邪氣、因つて以て入るを得ふか、

將たよむ、必す須に八正の虚邪、乃ち能く人を傷る、少師、答へて

曰く、然るを、賊風の邪氣、人に中る也、時を以て得ず、然るに

必す其の開くに因る也、其の入りて深く、其の内に極まりて入る

病する也、其の人と病する也、卒業なり、其の開かるに因る也、

其の入りて深く、以て其の病を留むる也、徐かにして遅し。

黄帝曰く、寒温有らば、和して適へば、腠理も開かず、然るに

卒病する者有り。其の政は何ぞ也。少師答へて曰く。帝、邪入る

と知る者呼、平居すと雖も其の腠理は開閉し緩急す。

大(目より)

其の政に常に時有り也。黄帝曰く。聞て得可き乎。少師曰く。人の

天と相ひ参する也。日月と相ひ應する也。故に月満まるときは則ち、

亦ま

海水は西に盛んなりて、人の血氣は積み、肌肉充ち、皮膚は緻り、

邪(ニヤウク)

之んく(ススノ孫名體)

毛髮堅く、腠理に密なり、煙垢着く。是の時に當りて、賊風に

遇ふと雖も、其の入りて淺く、深からず。其の月の邪空なることこれに

則ち海水東に盛んなりて、人の氣血は虚し、其の衛氣去り、

問七十九・五

形獨り有り、肌肉減り、皮膚は縦み、腠理開いて、毛髮残れ

チム

腠理薄く、煙垢も落つ。是の時に當りて、賊風に遇へば、則ち、

其の入りて深く、其の人を病ますや、卒業有り。

問八十四

黄帝曰く、其の卒然として暴死し、暴病する者有りは何ぞ也。

少師答へて曰く、三虚する者は、其の死すは暴疾なり。三虚とは

得る者は、邪も人を傷る能はる也。

(一)虚(ありて)

黄帝曰く、願はくは三虚を聞かん。少師曰く、乘年(一)此(二)虚(三)者(四)へて、

月の空に逢ひ、時を和さ失へば、因りて賊風の傷る所と爲す。

日也。歳ヲ和すまに因つて賊風ヲなけしは、民は少病にして少死
有り。歳に賊風の邪氣多くと、寒温和まざれば、則ち民は疫癘に
死す。

〔VI〕

黄帝曰く、産邪の風、其の貴賤を傷む所は、灯如、之を候ふは、余何
少所答へて曰く、正月朔日、太一は天に在り、之を宮に留む。其の日、西
北の風有りて、雨はふし、人は多く死す。正月朔日、平旦、北風ありは、
春に民多く死す。正月朔日、平旦に北風行ふは、民に病ふて多く、
十に三有り也。正月朔日、日中に北風ありは、夏に民多く死す。

靈七十九、九

正月朔日、夕時に北風ありは、秋に民多く死す。終日北風ありは、大に
病有り。死すまは十に六有^{らば}。正月朔日、風南方從り來ふは、命
けり。平郷と曰ふ。西方從り來ふは、命けり。白首と曰ふ。精を國に
破ひ有りて、人多く死亡せん。正月朔日、風東方從り來ふは、屋^{あり}
必發し、沙石揚り、國に大災有る。正月朔日、風東南方從り
行ふは、春に死亡すま有る。正月朔日、天に温^和利し、風なき
は、^{米をのこす}糶^{やす}賤く、民も病す。天寒く、之風ありは、糶^かう^て貴く、
民も疫病ふ。此れ所謂、^{いんや}歳の風に人を踐傷す。之候ふ也。

二月の丑に風あつざれば、民多く心腹を病まん。三月の戌に、暁はら
ざれば、民多く憂鬱せん。四月の巳に暑なうざれば、民多く瘴に病
せん。十月の申に、冥なうざれば、民多く暴死せん。諸山所講、
風は皆、屋を發し、樹木を折り、砂石を鞠り、毫毛を起し、骸理
を發りば也。